

田村キミ子一代記

近森リハビリテーション病院 副院長 兼 総看護師長

近森会の歴史とともに歩んだ30年

戦争の焼け跡も生々しい昭和21年12月、廿代橋北の現在地に木造一階建ての病舎が建てられ、先代の近森正博院長によって「近森外科」が開設された。近森会のこのスタートから61年4ヵ月を経過し、勤めた職員はすでに5千人近くに及ぶ今日。

『ひろっば』の一面トップ記事に初めて田村キミ子という個人の一代記が掲載されることになったのは、救急医療に取り組み当初から在宅生活を視野に入れてきた近森会の歴史そのものに、田村キミ子さんが寄り添う足跡を残したからにほかならない。

現在の近森リハビリテーション病院1階診察室のある辺りに、整形外科外来の処置室があり、午前中は外来。午後はナースがもう一人加わって手術室で、例えば糸の結び方から整形外科の医師に習う。これが田村キミ子さんの近森会でのスタートだった。

大きな転機は、近森リハビリテーション病院の前身に当たるリハビリテーション科が石川誠先生の着任により開設され、その1年後には付添が廃止され基準看護体制も始まったちょうどその頃。リハビリテーション科へ異動。

直後に三人夜勤体制が開始され、よ



平成元年7月30日に、リハ科のあった東館2階病棟で。入院患者さんからこの全紙写真が贈られた



20年後の現在の田村キミ子さん。温かくて大らかで、「引き際をここ数年、ことあるごとに考えてました」

り手厚い看護の必要な頸椎損傷の患者さんへの対応も始まった。近森リハビリテーション病院の完成は3年後の平成元年12月、3階病棟の師長に着任。

その3年半後には、リハビリテーション看護の先達で、師とも仰いでいた当時のリハビリテーション病院総婦長の河原木裕子さんから総看護師長を引き継いだ。4年後、総看護師長が副院長職を兼任することになったときには、「看護部門にいただく、後進にも繋げられる役割」と肚をくくったのだった。

今から思えば看護婦としてのスタートを切った40年前の東京時代、勤務態度が即評価され、「給料と評価が一体の緊張感」を叩き込まれたのが励みや緊張感のベースとなって今日まで続けられた、という思いが強いのだそう。周りの皆さまひとり一人への「とても言葉には表せない感謝の気持ち」を胸に、この末日付で近森会を退職。

「リハビリテーションのイロハ」を学び始めた当時、交通事故で車イス利用者となった上田真弓さんと出会ったのは印象的だったが、その真弓さんを中心に高知ハビリテリングセンターで、障害を抱えて生きる人々の社会復帰に向け、「できることをさせてもらう」生活がこの春から始まることになっている。

残された歯



近森 正幸

一カ月程前の水曜日に京都の学会に出席するために高知を発ち、学会のあと金曜は大阪で講演をして、土曜日は東京で研修会に出席し、日曜日にやっと帰ってきた。

そんな生活がずっと続いていて疲れが出たのか、今月に入って風邪をひき土曜日曜と寝込んでしまった。そのとき、以前からグラグラしていた右の上の奥から二番目の歯が痛みはじめた。

今回はさすがに覚悟して抜歯をしてもらおうと、いつも診てもらって

いる友永歯科に行った。できるだけ歯は抜かない方がいい、と痛かった歯を少し削ってスーパーボンドで固定してくれた。グラグラする歯をすぐ抜いて入れ歯にすれば手間隙かからず儲かるものを、両脇の歯を利用して内側から三本の歯を金属で固定して残すという、そんな手間のかかることをしてくれる歯医者さんがいることが嬉しかった。

一般の医療においても、人手をかけずにすぐ絶食にして点滴をうち寝かせっきりにさせるのが、これまでの医療の流れであった。口から食べて腸を使い身体を動かすという、残された機能をできるだけ活かすことが、生理的にもいちばん人間の身体にはやさしいやり方ではないか。

歯槽骨が弱った歯をなんとか残そうと思ってくれる歯科医のあり方が、本来の医療のあり方を教えてくれているように思える。

理事長・ちかもり まさゆき

『2007年度 近森会年報』
ホームページにアップしました。

少ない財源をどう配分するか 今こそぶれない病院運営が求められる

「下げ止まり」！？

4月よりの診療報酬改定は8年振りに本体(薬剤・材料費は除く)のプラス改定となったが、+0.38%と小幅であり、思い切った改定項目の新設や点数改定にはならなかった。これ以上診療報酬を下げるというゆる「医療崩壊」が加速するというところで「下げ止まり」ということであろうか。

勤務医の負担軽減

医療崩壊の原因の一つとして勤務医の過重労働が上げられる。その対策として勤務医の負担を軽減するために、新たにいくつかの診療報酬上の手当がなされた。各都道府県の基幹的な、いわゆる高度急性期病院や救命救急センターなどは、これまで赤字を出さざるを得ない政策医療として、補助金、繰入金で手厚く配慮されてきたにも拘わらず、今回、診療報酬でさらに上積みもなされた形となっている。補助金もなく自前で頑張っている民間病院にとっては辛い状況である。

管理部長 川添 昇



画期的な事務補助の報酬化

しかしそのような中でも、当院がすでに配置していた医師に対する事務補助スタッフについての診療報酬化は嬉しいことであった。これまでの診療報酬については国家資格保有者の医療行為のみに認められていたことからすると画期的な出来事である。この分野での診療情報管理士のさらなる活躍が期待される。

リハビリテーション医療の方向性

リハビリテーション医療についても質の評価がなされるようになったり疾患別リハビリ料の見直し等があったが、できるだけ早期にリハビリを開始し、手厚いサービスの提供により早期退院に結び付けている近森会グループの方向性は、これからもずっと続けていきたい。

後期高齢者制度スタート

4月よりいよいよ後期高齢者制度がスタートする。それに対するさまざまな診療報酬の設定がなされているが、評価、指導、記録などきめ細かな対応が要求されている。制度が落ち着くまで試行錯誤もあろうかと思われるが、現場で一つ一つクリアしていただけるものと思っている。

わたしのこの一枚 自分の原点

第二分院 5階病棟
主任 上総 満 高



▲いまのボク。20年前とほとんど変わってないでしょうか？

中学・高校と6年間、吹奏楽部でトランペットを吹いていました。いわゆる「ラッパ吹き」

でした。写真(左端、一番手前)は今から約20年前の高校時代のコンサートのもので、その頃は部員も80名を越えており、楽器も20種類以上ありました。

人に聴いてもらう曲を演奏するためには個人の技術もさることながら、ひとりひとりが協調性を持つことの方が大事であると教わりました。この教えが自分の看護、特にチーム医療を実践していく上での原点になっていると思います。

ぶれない姿勢の運営努力

その他に評価や見直し、新設の診療報酬の改定がなされたが、近森会グループ各院にとっては、わずかながら増収の結果となっている。

これまでの改定は医療の質を上げるよう努力した医療機関に対しての積極的な評価がなされたが、今回の改定は制度の見直しや対策に保険財源を投入したという消極的な改定となってしまったことが惜まれる。

目先の診療報酬改定に右往左往することなく、できるだけ良質な医療をムダなく提供し、早く治っていただけるよう、ぶれない姿勢で努力することがこれからの病院運営にますます必要となってくると思われる。

機能特化への展望

落ち着いた癒しの空間を確保できる新設の5階急性期病棟個室

第二分院 事務長 和田 廣 政

近年、日本の社会構造の大きな変化を受けるなど、精神科医療福祉の分野にも激動の波が押し寄せています。

平成16年に精神保健医療福祉改革ビジョンが策定されましたし、翌17年には障害者自立支援法も始まりました。良い医療を提供することで、患者さんが一日でも早く地域で生活できるようになるという、あたりまえのことが一層強く求められるようになってきております。

そのような時代背景を受けて、第二分院でもこの3月に病棟の機能再編と改装工事を行ないました。新築工事が完了したのは平成15年のことで、本年10月にすでに5周年を迎えます。

この間に急性期治療病棟(5階閉鎖・4階ストレスケア)が開設され、在院期間は短期化(80日前後)し、入院患者さんも、うつや神経症の患者さんが増加してくるなど、病院自体の機能も大きく変わってきています。

今回の病棟再編の目的は、

- ① 5階急性期病棟の受入能力の改善、
- ② ニードが高くなったストレスケア病棟の病床不足の改善、
- ③ 回復期病棟の重度化への対応、

以上の3点に集約できます。これをもう少し詳しく説明すれば、

- ① 5階急性期閉鎖病棟には個室を6室増設し、急性期入院への個別対応ができるようにしました。
- ② 4階ストレスケア病棟は6床増床しました。
- ③ 3階回復期病棟は閉鎖病棟(個別開放)に変更し、より重症度の高い患者さんの受入れが出来る病棟としました。

ところで、改装工事中は患者の皆様にはご不便ご迷惑をおかけしました。この場を借りてご協力に感謝申し上げます。

時代は個別化がますます求められるようになってきております。患者さんにとってどのような体制が改善に向かう近道になるのかを常に見据えて今後とも一同でがんばって参ります。



5階病棟で、担当スタッフ

院外エッセイ

中国餃子事件の教訓、食卓に上る。

高知医療センター 栄養局
次長 渡邊 慶子

1955年高知県生まれ。病院の管理栄養士として患者さんの栄養管理と栄養指導を担当。この4月から高知女子大学大学院健康生活科学専攻科(博士課程)に進み、リハビリ栄養について研究予定。



中国餃子事件から餃子を手作りする人が増え、皮や包み器なるものまでが飛ぶように売られているとか。自分で作ると新鮮な素材の食感や風味を味わうことができ、何より美味しく安心です。この調子で色々な料理を自分で作ることが定着すれば、日本の食料自給率向上も期待できるというものです。

私が子どもの頃は、畑に落花生や大豆、そば、ごま、サツマイモなどの食材が四季を通じて育てられ、採りたての野菜に、石臼で粉にしたきなこや餅、落花生の入った白和えなど、様々な料理が日々の食卓に上っていたものです。今でも思い出すだけで食材それぞれの色、匂い、食感や味が蘇り唾液腺を刺激してくれます。最近の食品業界では手軽で直ぐ食べられる冷凍食品や加工品が氾濫していますが、これらの食品は素材がわかりにくく、調理法もイメージできないので、何を食べても同じような味がします。

人の健康は食べ物によって維持されています。食べ物には三つの機能、栄養(一次機能)、感覚(二次機能)、生体調節(三次機能)があり、それぞ

れの働きが健康な身体作りに深く関わっています。

とくに感覚面での働きは、食事を目で楽しみ、匂いをかぎ、噛んで味わい、美味しいと思って食べる満足感を与える機能で、栄養面に効果的に働きます。

このように、健康な身体を作るためには、食べ物の質だけではなく、美味しく食べるということがとても大事なことがわかります。食べ物の嗜好は、小さい頃から食経験を積み重ねて形成され、食べ物の色や香り、食感などの知覚が記憶されて美味しさの評価が決まり、それには食習慣や食文化が大きく影響するといわれています。

中国餃子事件を教訓に、いま一度、地元の新鮮な食材を見直し、自分で作る食習慣を広げましょう。きっと本当の味覚と健康な身体を手に入れることができるはずですよ。

80歳になる実家の母は大阪に住む私の息子にせがまれ、ゆずの効いたお寿司や、赤飯、山菜料理などをせせと作り送っています。この食文化を受け継ぎ患者さんに伝え、また子ども達にも伝えていくことが私の務めです。

新人ナース「みんな揃って2年目へ!!」

新人教育体制の充実

教育・業務担当師長 川村久美子

昨年4月、不安と緊張いっぱいに入職した新人看護師が全員揃って1年を迎えることができた。

昨今、新人看護師を取り巻く医療界は、患者の高齢化・重症化、医療の高度化、在院日数の短縮による看護業務の複雑多様化するなか、新人看護師をいかに教育するかは重要な問題となっている。

当院の新人看護師の離職率は、過去3年間の平均12%となっており、教育委員会では、この現状を踏まえ、平成19年度の新人教育計画の見直しを行った。

入職前に、静脈注射・採血やトランスファアの研修を行い、確実なスキルを学ぶ事で、入職時に生じる不安の軽減を図っている。また、今年度購入した「吸



▲受付では、くじ引きも…

引シミュレータ“Qちゃん”を用いて、吸引の手技のシミュレーション学習を導入できた。

今年度の新たな取り組みとして、医療安全委員会と協同し、医療機器の正しい使い方や薬剤の基本的知識の勉強会を開催できたことで、新人看護師に医療安全に対する意識付けができたと思われる。

また、新人看護師の精神的サポートとして、癒しの会や食事を開催し、同期の仲間と語り合ったり、相談したりすることでリフレッシュができ、次



▲川村久美子師長から、「各自がどんな風に頑張れたか」総括のご挨拶で、開会

08.0321には、この一年を総括する会が開かれた

吸引シミュレータ“Qちゃん”で吸引手技のシミュレーション学習中のスタッフと、こちら向きに顔が見えるのは、「ここへ注目して!」と、指導に当たる川村久美子教育・業務担当師長



の看護への意欲につながったのではないだろうか。

本年は新人看護師の離職率が0%という大変喜ばしい結果になった。今後も新人看護師が楽しくやりがいを持ちながら働ける魅力ある職場づくりを目指し、新人教育体制を充実させて行きたい。



新館6階西病棟 主任 尾上 愛

早いもので近森病院の脳神経外科に就職して10年が経ちました。自分のなかではいろいろ悩みながらやってきましたが、今の自分があるのは脳神経外科が好きだという気持ちと、たくさんのスタッフの方々に支えられてきたからだと思っています。

今回主任の辞令をいただき、自分にこの役割の責任が果たせるか不安でいっぱいですが、新たなステップアップだと考え、高橋部長をはじめ、他の先生方、尾知師長、竹崎主任のご指導をいただきながら気負わずがんばっていききたいと思います。



わたしの趣味

画像診断部 町田 清史 上
田村 淳也 下

趣味は横乗り
気分は乗りノリ

仕事はほんノリ
チビとノッポの真っ黒コンビ



いきなりですが、ボクたちが一年中真っ黒な理由。それはサーフィンやスノーボードで太陽の恵みを全身に浴び、自然からのパワーをもらっている健康の証(あかし)なのです。したがって、決して遊び過ぎではありませんし、仕事のやり過ぎで放射線を浴びて黒くなっているのでもありませんので、あしからず。

が、確かに黒くなり過ぎて白衣を着たときに、「げっ、ヤバッ!」と思うときは、ままあります(笑)。注●仕事の「ほんノリ」は「本気のノリ」の略ですので、念のため。(田村淳也)



▼下の写真、プーケットに行ったときはホント真っ黒でした。はつきり言って現地の人よりずっと黒かったです!(田村)



出張報告 ● 沖縄県の浦添総合病院からの研修で近森病院に1年間

研修の甲斐のある研修

初めて高知へ来てから早くも1年が経とうとしています。浦添総合病院(沖縄)でしか働いたことがない私にとって、違う病院、しかも周りの環境が今までとは全く違う県外の病院というのは、想像もつかないような場所でした。沖縄での師長からは「内地の病院は厳しいよ」と言われていたので不安の気持ちもありましたが、院長をはじめとして看護部長や師長、病棟の先生方も温かく迎えてくださり、スタッフもとても明るく、南国同士で似ていることもあるのか予想以上に馴染みやすい環境でした。

病院が違えばシステムも違うというのを目の当たりにし、最初はとまどっているいろいろな苦勞もりましたが、周りのスタッフからの助けもあって徐々に慣れることが出来ました。

NSTや口腔ケアの徹底、急性期リハの充実、勉強会の充実などなど、浦添でも広めていきたいことがたくさんありました。また、ICUとリハ病院へも短期間ながら研修させていただけたこともあって、急性期病棟にいただけでは分からないことをたくさん学ぶことができ、とてもいい経験となりました。

近森病院に来たことで急性期病院の重要さを改めて実感し、患者が安心

6西病棟看護師 慶田元 亜香

して治療できる環境はもちろんですが、看護師やスタッフが働きやすく医療人としてやりがいを感じられるような病院作りに協力し、みんながHAPPY☆になれるよう貢献していきたいと思います。

この研修の機会を与えてくださった近森院長、梶原看護部長をはじめ、6西スタッフの皆さん、先生方、その他、名前を挙げきれないほど関わってくださった多くの方々に心から感謝です!! 本当に有難うございました。

研修終了の挨拶に訪れた看護部長室で、ホッと一息…。撮影は和田有紀子看護部長秘書

Your broken heart is repaired here

ピアノ連弾のコンサートを開催

デュオ
ナトゥール

ピアニストの高村美智代さん・野村朝子さんのご好意で、3月18日のお昼の時間帯にピアノ演奏が実現しました。外来に流れるゆるやかな優しいメロディで、患者さんの気持ちも和んだのではないのでしょうか。次回は4月18日(金)午後1時からの予定です。お楽しみに♪



リレーエッセイ

子どもに戻った日

薬剤部 猪野 由理

高知にお住まいの方なら一度は龍河洞に足を運んだことがあるとは思いますが、一般コースとは別に冒険コースというものがあることは皆様ご存知でしょうか？

私は一昨年友人に誘われこのコースを体験してきました。最初は正直、行くと言ってしまったものの「どうして休みの日に洞窟に行かないかがよ」と、全くノリ気ではありませんでした。

とりあえず内容を聞いてみても、写真をご覧の通り、まるで工事現場の作業員のような格好をして洞窟内の岩山を2時間かけて突き進むといったもので、ますますテンションの下がるワタシ…。

ところが! いざ始まってみるとやりたくないなどと言っている場合ではない!!のです。

物理的に絶対にムリ、という非常に狭い所をくぐり抜け、抜けたかと思うと次は相当高い岩壁を(しかもぬれてい)命綱ナシで登らなければいけない、といった危険極まりないものでした!!!

唯一の頼りであるインストラクターは笑顔で「あなたなら大丈夫!」といった、何の足しにもならない声援をかけ



てくれるばかり。もう信じるのは自分の手足のみ、考えることは目の前にある岩をクリアすることだけ!

それでも半ベソをかきながら難所を突破し、なんとか無事にコースを終えることができました。しかし終わってみると疲れてはいるものの、なぜかとても爽快な気分です。昔遊びきって疲れ果てていた子どもの頃に戻ったみたいでした。

● 4月の歳時記 ●

ヒナギキョウ



文と画

メンタルクリニックちかもりデイケア

藤原 知子

キキョウに似て小さいのでこの名があります。花言葉は「少女の優しさ」。青紫色で漏斗状鐘形の愛らしい花を咲かせます。多年草で、茎は多数が群らがって立っています。日当たりの良い草地に生え、細い花茎がひよろつと伸びていつも風に揺られています。

日本には一属一種で、関東や新潟より西に生えています。他にも、朝鮮半島や中国、台湾などに自生しているようです。

看護部 キラリと光る看護

看護学博士誕生！

看護部長 梶原和歌

その36



先日、高知女子大学大学院健康生活科学研究科の学位授与式があり、近森病院総看護師長の久保田聡美さんが晴れて看護学博士となった。博士論文は「看護職と組織の相互作用に基づくキャリア・デザインシステム」で副題が「看護職のキャリア意識とキャリア・ストレスからのアプローチ」という長いタイトルだった。

学位授与式で娘二人と久保田さん。撮影は高知女子大・井上正隆氏



要旨をわかりやすく簡潔に述べると「看護職ひとり一人が、看護職として働く意味を見出し、生き生きと働くことができる職場の実現のためには看護師長のサポートが重要であるということ、看護師自らが自分のキャリアに

対して主体的に向き合せ」というものであった。上級コースへ進んだ動機は看護には医師の指示のもとに……という法的制約があるにしても、医療や看護は実践の科学だから共に同じテーブルにつき、議論しあい苦労や喜びを共感しあいたい、それには学位をとり看護の立場からきちんと発言していく力をつけなければならない。そんな高い志が彼女を奮起させてきたようである。

スタッフが日々自己犠牲的に努力してくれていることや、立場や力の弱い看護補助者や学生さんが患者さんの支えになっていることもわかっているからこそ、この現実を何とかしていい看護ができる環境にしなくては、働き甲斐のある人生にしなくては、そんな風に思ったからこそ、この論文が誕生した、ということも、付け加えておきたい。

次号で紹介しようと思っている修士卒業生たちのテーマもその点で意欲にあふれていることをお伝えします。

健康管理センターかわら版

「アンチエイジング」

～楽しく歳を重ねること(1)～

『ひろっぴ』登場は久しぶりなので、何を書こうかと悩みました。いつもなら文章の神様が降りてきてくれるのですが今日は全く…。こんな時は人に聞くのが一番♪というんな方に聞きました。



「アンチエイジング」と即答してくれた方がいて、面白いと思い決定！そこで言葉の意味を正確に知りたいと調べてみました。「アンチ＝抗う」「エイジング＝加齢」の意味で直訳すると抗加齢、抗老化。

女性が外見の若返りのために行う美容をイメージしますが、医学としてのアンチエイジングは老化も含めた健康状態のレベルを上げることだそうです。年齢に対し、やみくもに抵抗するよりも加齢を味方に付け楽しむ方がいいですよ。私の祖母は2月で93歳になりましたが「何歳になった？」の問いかけに「まだ93歳」と笑顔で答え、大好物のお饅頭を美味しそうに食べていました。

私自身、歳を重ねることに少し抵抗を感じていましたがこの祖母の言葉で、前向きにとらえた方が人生を楽しめるに違いないと気づかされました。皆さんは、歳を重ねることにに対して前向きですか？次回は体と心エイジングについて詳しく学んでいきたいと思います。
(健康管理センター保健師 野口由美)



2008年3月25日、見事に咲いた

奥さまと娘さんと共に桜を背景に、理事長と管理部長と記念撮影



昨年11月11日に永井貫一さんが亡くなられた。永井さんはこれまで長い間ずっと近森各施設周辺の草木の手入れを熱心にして下さっていた。9月に理事長から感謝状を贈らせてもらった矢先のことだった。奥さまや娘さんやお付き合いの深かった人々に付き添われながら、あっという間に天に召されてしまった。

最期の最期まで、周囲の人々を気遣い、また近森の草木に思いを馳せられていた。亡くなられてからご家族より「近森病院さんに大変お世話

になったので、何か記念にのこるものを」と、お申し出をいただき、永井さんの好きだった桜を寄贈していただくことになった。

新館玄関前に植樹された桜はこの春、見事に咲いてくれました。これから毎年桜の咲く頃に永井さんを偲べます。有難うございました。ご冥福をお祈り申し上げます。合掌。

管理部長 川添昇

第9回

公開県民講座のお知らせ みんな知っちゃう？ リハビリテーション

2008年4月19日(土)
午後2時～4時
高知県民文化ホール(グリーン)

- ①リハビリテーションのイロハ
近森リハビリテーション病院院長 今井稔也
- ②入院したらどうするの？
退院したらどうなるの？
作業療法士 矢野勇介
- ③きつと役立つ制度のはなし
ソーシャルワーカー 山田 史
- ④今日から始める予防と体操
理学療法士 川瀬正敬

入場無料 申込不要



この夜行バスに乗り、毎週末は家族の待つ九州の自宅で英気を養う

原則、金曜日の最終の夜行バスに飛び乗って九州の自宅に戻り、土曜と日曜は小学3年になる長女と5歳の長男とずっと一緒に過ごす。二日間はほとんど台所に立って5日分の家族の朝昼を中心に食事を準備し冷凍保存メニューを増やす。近森会の臨床栄養部に勤め始めて丸一年、田代さんはずっとこの週末生活を続けている。

「九州からでもやろうと思えば勤務は可能」という現在の生活にどうして至り、またこの生活がどうして可能になったのか、少し説明が要るのかも知れない。ただし、実家の父上には「嫁に行ってるのに、そんな我がママが許されるか!？」と、最初は大いに疑問を持たれる決断だったとか。

まだ幼い最愛の子どもたちの存在は、それだけで田代さんの向学心を鈍らせたが、その背中を見事に押してくれたのは技術者の夫だった。「子どもたちが

第50回記念

地域医療講演会のお知らせ

代替医療の まなざしから見た 現代医療

2008年4月25日(金)
午後18時30分～

入場無料

高新文化ホール

(高知新聞放送会館東館7階)

講師 医療のデザイン室・代表プランナー
澤田祐介先生

東海大学救急医学講座教授、長野県副知事、慈泉会相澤病院救命救急センター長などを経て現職。

※代替医療という異なる視座から医療のあるべき姿についてご講演いただきます。

NST専門療法士 として、 臨床力を磨く日々

思春期の時こそ家に居て欲しい。技術を身に付けたいなら、いま自分に投資をしたらいい!」。有難い夫の言葉はさらに続く。「やれないと思えばやれない理由ばかりを探し、やろうと思えば、やれる工夫が考え出せるんと違うか!」。

正直に言えば、結婚までは腰掛け的に仕事をしてきたかも知れないし、管理栄養士の国家資格を取るときも、子どもが小さいから、家事が大変だからと、いつも言い訳ばかりを探していた、と……。せっかくNST専門療法士の資格を取ったのに「ロクに栄養管理もできない…」と、田代さん、優しい家族や自身の状況に甘える自分を大いに反省!

そこに、近森会臨床栄養部の宮澤靖部長との出会いがあり、栄養サポートチームによるアプローチがどんなに有効か、身をもって学びたい。40歳になったときの自分が、自信を持って仕事ができるようになりたい!

そんな熱い思いをどっさり詰めて、いま近森病院3階東病棟の担当栄養士として、エネルギーにウィークデーを過ごしている。

そんな田代さんの今日までを駆け足で眺めたい。そもそもは、作っても作ってもペロッと平らげて母を驚かせていた子ども時代の兄二人の食欲に端を発する。三番目に生まれた心優しい女の子は、母を助けて調理し、兄たちにも親にも喜ばれる毎日を送っていた。したがって食に関する仕事に就くのは、本人にも家族にもすごく自然な流れだった。

『ひろっば』のために田代家一同
田代家玄関前集合!で記念撮影

兄ふたりが東京の有名国立大に進学するなか、田代さん曰く「兄たちには出がらしと呼ばれてましたから(笑)」という成績で、残念ながら第一志望の国立大には落ちてしまったけれど、子どもの頃から好きだった食の道を結局は志すことになった。

近森会就職の当初の目的は「自分自身のスキルアップ」だったそうだが、「有難く思える環境が余りにも多く、色々なレクチャーを受けられる毎日を何とかフィードバックしたい!」と、益々内なるエネルギーを燃やしている。こういう迫力が、近森理事長や梶原看護部長を「栄養士の持つ臨床力を見せつけられる」と、感心させるのだろう。

「毎晩一人反省会を持ち、反省点ばかりが浮かんでしまいます」という気の抜けない日々だが、この緊張感こそが件の臨床力に繋がるに違いない。

シリーズ●クリニック探訪31

けいせい 慶誠会 高岡内科



▲ 院長・高岡道夫。S 25年7月10日、いの町出身。趣味はパソコン（自作）、読書（ミステリー）

昭和36年、当地で内科有床診療所を開業した先代の跡を継ぎ、平成元年より私と家内の医師二名で診療しています。内科疾患全般の初期治療と、維持期の外来を中心に診療を行ない、高齢者の肺炎、心不全などは入院治療で対応しています。通院の困難な方には往診もしています。

http://www.keisei.or.jp/guide.html E-mail:takaoka@keisei.or.jp

診療科目：
内科、呼吸器科、循環器科、
消化器科、放射線科

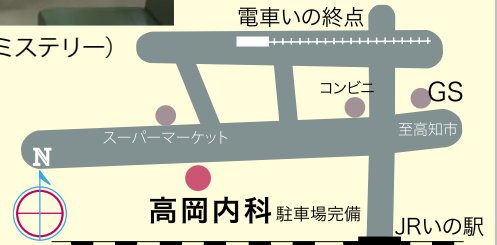
病床数：19床

診療時間：9時～12時30分
14時～17時30分

休診：木曜午後・日曜・祝日
年末、年始

処方：院内処方

電車の終点



近森会グループ

外来患者数	16,904人
新入院患者数	776人
退院患者数	766人

近森病院

平均在院日数	14.72日
地域医療支援病院紹介率	88.09%
救急車搬入件数	398件
うち入院件数	212件
手術件数	374件
うち手術室実施	250件

2008年
2月の診療数

企画情報室

図書室便り

(2008年2月受入分)

- ・泌尿器科診療のための画像診断 基本検査から最新のモダリティまで / 馬場志郎 (他編集)
- ・骨系統疾患 X線アトラス 遺伝性骨疾患の鑑別診断 / 西村 玄
- ・脳の形態と機能 画像医学の進歩 / 福田 寛 (編集)
- ・最新整形外科学大系 14 上腕・肘関・前腕 / 高岸憲二 (他専門編集)
- ・CUMITECH 血液培養検査ガイドライン / 松本哲哉 (他訳)
- ・症例に学ぶ EBM 指向 輸血検査・治療 / 大戸 齊 (編集)
- ・第38回日本看護学会論文集 (成人看護Ⅱ、小児看護) / 日本看護協会 (編集) 《別冊・増刊号》
- ・別冊医学のあゆみ 造血管腫瘍の分子標的療法 / 黒川峰夫 (編集)
- ・別冊医学のあゆみ 関節リウマチのパラダイムシフト - 生物学的製剤時代の最新治療動向 / 宮坂信之 (編集)
- ・別冊 NHK きょうの健康 うつ病 正しく知って治す / 野村総一郎 (総監修)
- ・老年精神医学雑誌 vol.19 増刊Ⅰ アルツハイマー型認知症の臨床的課題を再考する / 平井俊策 (他著)

編集室通信

▼ やっと春も本番を迎えました。オルソリハビリテーション病院も開院から順調に推移し、私ごとですがその役割も増え、現場に会議に出張にと、忙しく動き回っています。フットワークの軽さが信条ですから、求められればいつでも！どこでも！どこまでも！という覚悟です。だからという訳でもないのですが、『ひろっぱ』の編集会議への出席も難しくなっておりまして、編集委員の交替を申し渡されました。委員であってもなくても『ひろっぱ』の読者であることに何ら変わりはありませんから、記事を楽しむにしたいと思っています。(松木)

写真展のお知らせ

患者さんやご家族と、あるいは職員間においても、より好ましいコミュニケーションの一助として、写真展の開催が企画されています。毎年毎年の職員旅行で、皆さんの力作がどっさり溜まっているという話も聞かれます。「これこそは！」と思う写真を皆さんぜひ見つけておいてください。詳細は決まり次第、またお知らせします。

主催：近森会グループ

コミュニケーション委員会

共催：近森写真倶楽部 (CPA)「瞬」